

<目的> 湿潤感は着衣の快・不快を左右する。本研究では気相および液相水分による刺激がどの程度皮膚の湿潤感の発現に関わるかを調べることを目的として、濡れおよび湿りを局所的に負荷する次のような実験を行った。

<方法> 1) 液相水分による刺激：成人女子被検者5名に対し、気温31℃、50%RHの人工気候室内において、温湯を滴下したろ紙を身体8~14部位に貼付した。ろ紙に滴下する水温は、皮膚に添付した時に温冷感覚を生じない様、皮膚温と同程度に調整し、水分量は十分に濡れるがしたたり落ちない程度になる様、正確に計量した。ろ紙の大きさは2.5cm・5cm・7.5cm・12.5cm角とし、その上をポリエチレンフィルムで覆った。被検者はセミヌードとしろ紙貼付後の濡れ感及び皮膚温を1分毎に測定した。2) 気相水分による刺激：31℃、50%RHの人工気候室内において、ポリエチレンフィルムを用いて身体各部を局所的に密閉した。皮膚からの蒸散分により被覆部内の湿度が飽和状態に近づくまでの内部湿度及び湿り感を測定した。又、内部湿度を調整できるカプセルを身体各部位に装着し、カプセル内湿度を変化させた時の、当該部位のしめり感を申告させた。

<結果> 1) 濡れ感は、ろ紙が大きくなるほど強く、又持続時間も長くなる傾向が見られた。上腕・上腹等は比較的濡れに対する感受性が強い傾向が見られたが、全体としては、濡れに対する感覚は順応が起こりやすかった。2) ポリエチレンフィルム内の湿度が上昇しても湿り感の上昇は少なく、フィルム除去後皮膚面からの蒸発が起これると、湿りが強く感受された。カプセル内の湿度変化に対しては、ほとんど湿りが感受されなかった。